

JAPAN GET-ACQUAINTED PROGRAM

NEWS LETTER NO. 1

September, 1961

Editor
Hachiro Kubota

近頃CBAがしきりにアダムスキを攻撃し、機関誌中のアダムスキに関する記事はことごとく皮肉な調子で書かれてあって、「この際やつつけてしまえ」といふような分裂感情が溢れているのを感じます。これは或る方面から出た怪情報、すなわちアダムスキは悪の手先であるという説をCBA幹部が信じただからであり、そして私までを「ブラック」だと云いだしたのは私がアダムスキを支持してゐるからというよりもむしろ個人感情がたぶんにからんでゐるからと思われまゝ。私に云わせればこれらは誤解以外の何物でもなく彼らの自己拡張の心のあらわれであるとしか思えません。しかしはじめに考えようとされる人が非常な疑念におちりて、その結果円盤問題に関する興味をも失うようにならるゝのは残念でありますので、ここにいふまじか新しき情報を提供し、私の考えをつけ加えてご参考に使いたいと存じます。

X

X

ジョージ・アダムスキは悪の手先ではないと私自身思ひます。私の感ずるところではクリシュナムルティ氏に匹敵するほどの、おそらく今世紀最大の偉人群の一人であると思われまゝ。そしてそのことがみとめられるのは彼の死後、地球のロケットが太陽系の諸遊星へいんぱんに着陸するようになってからだろうと思ひます。これは一冊や二冊の書物を読んだだけで判断したことではなく、彼から直送される書簡類や各国の研究団体から来た膨大な情報類を調査研究した結果、確信をもつようになったのであります。たんなる盲信ではないつもりです。私と同様に各国の研究家が彼を偉大だとみなす理由は、彼の異常な体験よりもむしろ彼の思想に価値をみとめてゐるからです。その価値は時代の進歩とともに精神科学、特にテレパシーの研究熱がたかまってくることによつて認められるようになるでしょう。しかしそれはほど遠いことです。

およそアダムスキほどに世界中から非難と嘲笑を

浴びた人はいないでしょうが、また彼ほどに他を攻撃しない人もありません。彼はだいぶ前から G. P. Acquainted Program (略称 G. A. P. 知り合いになる運動) という組織をもちました。これは、他の進化した遊星では誰もかみな知り合いておって未知の人というのはいないにもかかわらず、この地球では未知の人があまりに多いために不和や闘争が生じるので、我々はなるべく多くの人と知り合いになり友達になるほうがよいという趣旨のもとにつくられたもので、現在は十七ヶ国の研究者がこの組織網に加わっていて、各自が研究グループをもち、定期的に情報を交換し合っています。そしてアダムスキを最も強く支持している円盤研究団体は、最高の円盤研究誌として知られる英国の「空飛ぶ円盤評論」誌の編集陣です。二この編集顧問である J. M. レイド氏はかつて G. A. P. の英国代表者でした。二この研究誌は現在まで一貫してアダムスキの撮影した円盤写真だけを十枚一組で(ただしその内一枚は

けはオーガスト・ロバート氏の撮ったもの) 希望者に頒布しておりまして、C. B. A. が言うように「アダムスキの撮った写真のすべては模型を写したのである」というのが世界の定説である」という説明がどうぞらしいウソであることがわかります。模型を写したような写真を「空飛ぶ円盤評論」誌ともあろうものが頒布するわけがありません。かつて C. B. A. の幹部として働いた私は幹部連の粗雑な言動に悩まされたものでしたが、二このことは詳述を避けることにします。

今春の或る日、アダムスキから長文の書簡を受けとって一読した私は、これが C. B. A. のコンタクト・ケースを支持することを意味するものであると感違ひして、早速その旨を某幹部宛に知らせましたが、二このことがそもそもの間違いでした。アダムスキは C. B. A. のコンタクトを決して認めていなかったことがのちに判明したのです。しかしその頃はまた私も松村氏の体験の眞実性を信じていて、五月三日に福

岡で講演を行なつたあとの、ディナーのときにもそのことを話した記憶があります。それより少し前に私は小川氏宛に親展状を出し、CBAのやり方がよくないために会員間に非難の声があるのもっとしつかりやろうではありませんか、といった意味の一種の檄文を送つたのですが、これは当時小川氏が編集上で担当な発言力をもつておられるのだからと考へたからでした。そして非難の声があつたのも事実で、たとえばCBAでは原稿を書きもしないうちから書籍の広告を出して金だけを先取りするといつたやり方や、厩大な寄付金を乱費しているとかいふ噂は相当地方の会員も知っていたのです。その頃小川氏がボードを信じておられたことを全然知らなかつた私は氏の好意ある返事を期待していたのですが、この親展状がどつしたつけか松村氏に言わされたのです。そして私までか小川氏と組んでボード事件の一味となつて策動していると誤解された松村氏は、突然私宛に速達で激怒の手紙をよこされました。それ

はまるで脅迫状であり、血迷つた恐ろしい文面の手紙で私はそれを読んだ目は恐怖でメシが喉に通らなかつたほどです。つまり、速刻上京して意見を開陳せよ、まなければおまえの責任問題にまで発展させてやる、といった意味のことが自筆で書かれてあつたのです。氏が激怒しやすい性格の人であることはかねてから知っていましたか、それは純真さのしからしむるところだろうと善意に解釈していました。しかしどうもこの解釈はあつていなかつたようです。それよりも私が突に不思議に思つたのは、氏のように感情を抑制することのできなけんが地球人の代表としてよくもコンタクトマンに選ばれたものだということです。そして氏がコンタクトしているところを「宇宙人になるもの」の正体について深く考えざるを得なくなつてきました。そういえば、大震災発生予告とそれに関連したさまざまなおそろしく馬鹿げた計画や活動など疑惑のフンが多くあり、その「正体」について私は私なりの臆測をもつていま

すけれどもここには省略することに致します。

ところで「アダムスキの秘書」であつたルーシー・マクギニス女史は世界中の円盤問題を調査してきた人であり、いわば各国のコンタクト・ケース解明の或るカギを握る人物であると思われまふので、七月二十一日付をもって私は女史宛に長文の質問状を出してみました。この人は思想的にも宛高^{サダカ}くて、まれにみる賢明な婦人であると私は思つておりますし、その情報は一読の価値があると考へています。その回答が来る前に同女史から七月十二日付で長文の書簡が来ました。これはアダムスキ一家が財政難からパロマーの財産を売却して他の町へ五月に移動したことと、それを機会に女史も社会保障の資格を得るためにアダムスキのもとを離れたことを報じたものです。この文面で女史の考え方が、或る程度わかりまふので、重要な箇所を次に抜粋してみましよう。

「しばらくのあいだ私はアダムスキ（または他の誰

か）の印象に私の印象を従わせるよりもむしろ私自

身の印象に従ふことのできる道を見出さねばならぬ」という感じをもっていました。彼のために私はずいぶん長いあいだ働いてきたのです。彼に会つた人のなかには彼がきわめて支配的な個性の人物であることを知つています。もしあなたが私を知つたならば、私もまた同じような性質であることに気づくでしょう。しかし、働き手は指導者の命令に従うべきものであると私はいつも考へていました。プログラムは宇宙人のそれであつて、世界中の人々に知識をわかつためにアダムスキによって指導されていました。このために私はアダムスキの印象に私自身の印象を従わせたのです。もっとも私は、自己成長における最も重要な要素の一つは自分自身の印象を認めてそれに従ふことを学ぶことであると多くの手紙で書きましましたけれども——。こんなふうにしてこそ人は望ましい考えから眞実の印象を区別することを學ぶのです。どうぞご理解下さい。」

一九五九年にアダムスキが海外から帰ったのち、
彼と私が交した或る会話のあいだで彼は云いました。
「ルーシー、一体どうすればあなたは自分自身を助
けることができないうきに他人を助けることができ
ると考えるか？」 私はこれがすばらしい質問であ
ると思ひ、ただちに解答を求め始めました。この質
向は私がなそうとしていたあらゆることに一つの新
しい視野を与えたのです。」

「長いあいだ私はアダムスキからすいぶん多くを学
んできました。私はこの知識を皆さんがなしている
のと同じような無味乾燥な世の中の仕事に応用しな
ければなりません。」

「彼の訣別は長いあいだ私が説いてきたことを実
行するようにと私の内奥でせきたてる力によるのに
すぎないということをどうぞ理解して下さい。私が
彼と共にいた長いあいだの彼の体験、すなわち「実
見記」や「同乗記」や私たちの無数の手紙のなかで
述べられた体験は、私が生きる限り支持するつもり

です。私は彼の最初のコンタクトの目撃者であつた
ことをお忘れにならないように。私たちは眞実であ
ることを知っている物事を決して否定はできないの
です。私はこの知識を基礎づける証拠をもちま
せんが、他の力をもってしてもゆすぶることは決し
てできないという内奥の確信をもっております。そ
れとは反対の報告もあるでしょうが、しかし私から
の報告を事実として考えて下さい。過去には誤つた
報告もありました。私たちはこれをどうしようもあ
りません。私たちは眞実であると知っている物事に
たいして眞実であり得るだけですよ。」

「ずっと以前に、そのために私たちが集められた
物事を私たちは完成したと思ひます。そのために
私たちが存在せしめられたと云ふの「父」の意志を
遂行するために新しい道が今開かれています。私の
祈りはすなわち、私たちは勇敢に賢明に前進しよう
として私たちのすべてが受けついでいて、しかもそ
の力においてはきわめて破壊的なあの個性という特

性から自分たちを自由にしよう、ということにあり
ます。

X

X

次に前述の七月二十一日付の私の質問状にたいす
るマクギニス女史の回答をかかげることにします。
これは八月十五日付の航空書簡でよこされたもので、
二二では最初の十行ばかりを省略します。

X

X

問 ジョージ・アダムスキはどんな人ですか？

私(註、久保)はいつもアダムスキを私の理想とし
てきました。彼は聖フランシスのような人ですか、
それともハイド氏のような人ですか？ あなたは彼
を聖人だと思えますか？

答 アダムスキは聖人ではありません。彼は人

生の行路を歩みながら偉大な知恵と理解力とを身に
つけたきわめて力強い人です。また彼は数多くの体
験をも積んできましたが、同胞を援助するためにそ
の体験を世界に知らせました。そうすることによっ
て彼は古く束縛された諸理論のために役立ち、人

類をこの小さな遊星に閉じこめたりせずなを開放し、

より大きな興味ある生活と、彼がもとは何もない空
間だと考えていた宇宙への旅にたいする希望を人類
に与えました。彼は正式な教育をほとんど受けてい
ませんが、偉大な勇氣をもっていて、そのために教
育のある人々があえて試みようとしなかった物事を
成就することができたのです。

問 ニ 彼は大酒飲みだと云われていますが、それ
はほんとうですか？ (註、CBAの田盤ニースにその
ような記事が出たので、この質問を出した)

答 彼は大酒飲みではありません。ときどき社交
上飲むことがあります。しかし大抵の人は、特に
米国ではそれをやります。私はそんなことが人間の
欠点になるとは思いませんし、あなたもきつと思わ
ないでしよう。

問 ニ 存知のようにこの国には松村雄亮という
有名なコンタクトマンがいて、彼は一九五九年の夏
以来、他の遊星から来た宇宙人とコンタクトを続け
ていると称しています。しかし私の考えでは、この

宇宙人たちはアダムスキの宇宙の友人たちとは異なるようですよ。アダムスキはこの事実を認めましたか？ 松村氏の体験はアダムスキの体験と関係がありますか？ それとも多くの異なる宇宙人がこの地球へ来つつあるのですか？

〈答〉 もし松村氏が実際に肉体をもつ宇宙人とコンタクトしているとすれば、たぶんそれはアダムスキが会った如何なる宇宙人とも全然異なるようです。

私たちのこの太陽系内の隣人たちの行爲とは全く違った行爲をするように思われるその種類の訪問者については私は全然知りません。彼らが松村氏に一方的にテレパシーの能力を与え、彼の生命を危険に陥れしめられるようなことを仕向けるといふことにたいし（註、この事にたいしは別に詳報を述べた）、彼らがこの地球の人間であろうと他の遊星から来たのであると、私なら彼にたいしてその宇宙人なるものに警戒せよと忠告したいところです。私がこれまでに知り得る限りでは、それが他の遊星人であるといふこと

は疑わしいようですし、また土星とは全く関係がありません（註、松村氏が土星に着陸したという説を知らせたことに因する記事）。アダムスキは多数の土星人と会いましたが、彼らの誰も他人に一方的に想念を押しつけるようなことは全然しないといふことです。

私たちは誰もが自分で食物を食べ、自分で生長し、そして自分で学ばねばならないのと同様に、私たちは無限者々の意志を行なおうとするならば、自分で考え、自分で自己の内奥の導きの手に気づいてそれに従うようにして、自分自身の生命の主人にならねばならない、といふことを彼ら宇宙人は知っているのです。

〈同 四〉 ジョージ・ウィリアムスンについて、あなたはどう考えますか？ 彼はきわめて知性的で宗教的感性の高い人であるによく云われています。もちろん私は彼が約十年前に「デザート・センター」における六人の目撃者の一人であったことを知っています。しかし彼はあまりに独断的であって真理の探求者と

はいえなにようです。彼の数々の著書はUFO研究書のなかで最もわけのわからぬものであり、特にライオンの隠れ家に至っては尚更です。彼の著書である『宇宙語—宇宙人』をあなたはどう思われますか？ 同書に掲載されている例の『足跡』の解説をあなたはナンセンスだとは思いませんか？

〈答〉 ショーシ・ウィリアムスは心霊の分野に入ってしまった。私はそれを支持しません。彼はそれに入る前にこの分野の知識をもちませんでした。私の意見では、盲目的にそのような事をせんざくするのはいわめて危険です。人類学者としてウィリアムスはすぐれているかもしれませんが、それは私にはわかりません。彼は今、南米での科学的探険に関する講演を行なっているというのですが、私がこれまでに行なった種々の調査によって知り得た限りでは、彼の宇宙人に關する発表で私が聞いたことはすべて眞実ではありません。私は彼の著書をあまり読む暇がありませんでした。これはその著書から

受ける感じが読書に時間をかけようという気持を起させなかったからです。『足跡』に關する彼の解説は完全に間違っています。そうです、私はそれをナンセンスだと思えます。

〈問五〉 C E Aの幹部たちは『黒衣の人間』すなわちまじめなUFO研究グループを妨害しようとしている『悪』の存在を信じ、それらがオリオン星座に姿を現するものであると云っています。あなたもそう信じますか？

〈答〉 否、私は『黒衣の人間』がオリオン星座から姿を現しているとは思いません。あまりに大きな噂がこの特殊な出来事に与えられつつあると私は思います。が、正直に感ずるところ、これは宇宙飛行についての興味をそらさせようとして人々の心に恐怖をうけつけたがっているこの世界の調査者たちであると思えます。人々がとりあわなければこの問題は自然に消滅するでしょう。この種の出来事が起ってからすでに数年かたっていると思えます。

△向六▽ CBAの会員たちは宇宙人の宇宙船の名称が太陽語(ソルリス)(註、宇宙人の言語と云われているもの)で「ウェントラ」と呼ばれるのであると信じています。あなたはアダムスキからそのことを聞いたことがありま
すか？

△答▽ この種の愚かしい言語や「ウェントラ」という名称は心霊や霊媒から発したものです。宇宙の旅行者はこのような言語や名称を用いません。私はこの実を確証してもらいました。

△向七▽ ラインホルド・ロ・シュミット、ハワード・メンシール、そしてスタンフォード兄弟についてあなたはどう思いますか？ 特にシュミットが円盤でエジプトへ旅行した物語とメンシールの「土星の音楽」については？

△答▽ 私はスタンフォード兄弟が一機の宇宙船を見た主張していることだけを信じます。しかし無数の人々がそれを目撃しているのですから、別に異常なことではありません。お尋ねの他の二人について

は私は全然支持することはできません。彼らの物語のただの一片をも私は全く信じておりません。

△向八▽ 松村氏が主張している宇宙人情報によれば、きわめて近い未来に地球の急激な傾斜が起り、世界の人口の殆どが死滅するということになっています。それでCBAでは会員と家族を或る一定の場所にひそかに集める計画をしており、そこで大気圏外から来る大宇宙船が着陸して皆を救出することになっています。これは真実のことであると思えますか？

△答▽ 私の意見では否(イ)です。アダムスキがこれまでに知り得て私に語ってくれたすべてから考えますと、進歩した精密装置をもつ宇宙人でさえも自然の出来事の発生する時や場所を予告することは不可能なのです。彼らは、何かが起ころうとしているのではないかと危ぶむかもしれませんが、その性質を臆測するかもしれませんが、時々「所」を予告することはできないのです。

△向九▽ アダムスキは自分自身の完全なテレパシ

ーの能力をもっているのですか？ 私は彼の著書で
ある「精神感応」を非常に価値のあるものだと思っ
ていますが、しかしそのなかに速くある練習を突
行するにはあまりに困難です。この書によってテレ
パシーの能力を得ることに成功した人がいますか？

《答》私の知る限りでは、どの誰でも完全なテレ
パシーの能力をもつ人はいません。宇宙の兄弟たち
でさえも失敗をすることがあるとアダムスキに語っ
ています。彼の著書「精神感応」に出ている練習法
については、それは実際にはむづかしくはなく、た
だ練習にあたって忍耐と不屈さを要するだけです。
結局、私たちの殆どはこの二つの面に練習を必要と
するのではないでしようか。そして私たちは新しい
努力を始める場合、一粒の種子から木が生長するの
を期待するよりもはるかに急いで結果を期待し、かち
になります。しかしそのことをちょっと考えてみれ
ば、この二つのあいだにさほどの相違はないのです。
《向一》あなたは日本へ来るつもりでいますか？

もし来るのなら、この町に滞在中のことは私が心
配しましょう。

《答》日本へ行きたいのですが、それには多くの費
用がかかりますし、それを私はもっていません。し
かし私はできるだけ金をためるつもりですし、充分
にできれば必ず旅行をしましょう。世界の各国を訪
ねることほど楽しいことはありませんし、特に長い
あいだ一緒に働いてきた誠実な友達に会うのは尚更
です。ご親切を有難う。父の豊かさが私をあら
たの美しい国へ行かせるほどに充分に私へ注ぎかけ
られるとき、ご親切を受け入れることを楽しみにし
て待ちましょう。(註、以上で質疑応答は終る)

(ルーシーの付記)

あなたから去っていった人々(註、アダムスキを信じ
なくなつた人々)についてはどうぞ心配しないで下さい。
世界は大きく混乱し始めて、これまでになかったほ
どの変化が急速になされつつあります。人間は同じ
ものでもって他に報います(註、善は善を、悪は悪を)

あなたが理解をするとき、あなたは悩むことはあり
ません。無限者の愛のなかでは、如何なる人間
が企て得るよりもはるかに賢明にあらゆる物事が働
き出すでしょう。(一 中略一) しかし現在のところ私
が云いたいことは、松村氏が知的でまじめな人であ
るというあなたの意見に同感ですが、しかし何者か
が彼にたいしてきわめて残酷な欺瞞トリックをしかけている
ように思われます。私は彼が真実の宇宙旅行者たち
に会って、肉体的に宇宙旅行をしたという感じがど
うしてもありません。彼は一種の夢ドリームの状態でのよ
うな体験をしたのかもしれませんが。彼はどれくらい
のあいだ宇宙旅行に出たのですか？ そして彼
の体験を友人たちは確証しましたか？

私は誰もがそうであるように私自身の印象を述べ
たにすぎないのですから、そのことをご銘記下さい

X X

右のルーシーの手紙の、中略の部分には、C B
Aのコンタクトについてもっと詳細を知らせてくれ

ればもう少しよい回答ができるであろうと述べて、
逆に私宛に質問がしてありますが、私はそれにたい
してべつに返事を出しませんでした。あれこれと考
えながら日を送っているうちに、八月二十八日付の
航空書簡でアダムスキから私宛に質問の回答が寄せ
られて、そのなかに次のような箇所があったからで
す。

X X

『そして私は彼が(註、松村氏が)コンタクトマンで
ないことをはっきりと知っています。あれは彼の心
のなかで作られられたことでは、宇宙人かそのこ
とを私に話してくれました。』—後略—

X X

これは一つの資料として掲げたにすぎないのであ
りますから、そのつもりでご検討下さい。C B A 攻
撃の材料ではありません。

さて、ここでウィリアムスンについて言及してお
くことにしましょう。彼をわが国で最初に紹介した

のは私だろつと思ひます。彼の著書『円盤は語る』の内容を要約したものをいつて見たか『オール読物』に出したことがありますか、その頃は私のUFOに關する知識はきわめて乏しくて(今でもそうですが)彼の著書の内容には眞憑性あるものと考えていました。もちろん彼が心靈実験用文字板や宇宙通信機を用いたことそれ自体は事實だろつと思ひます。イスラエル・ノーキンの『円盤日記』中に通信機の写真まで出ていたくらいですから。しかし、その後眞實のUFOと心靈的なものとの區別を少しづつ知るようになってウィリアムスンにたいする見方が変わってきました。加うるに各国と情報交換していろいろうちにわかつてきたのは、彼はコンタクトマンでもなんでもなく、靈界通信をUFOの分野にもち込んでいたために、UFOの科學的研究にひどい混亂をひき起したりして、アダムスキ側やアダムスキ側のいすれからも相手にされない人物であるらしいということだ。彼の書『宇宙語—宇宙人』中に載

っている『足跡』の解説を私は原書で一読して感を出したくなつたほどあつりにそれはひどいという感じがしました。つまり彼は破綻で最初に發生したあの有名な事件の本人の目撃者の一人であつたことは事實のようですが、そのわずかな体験をもとにしてUFOと心靈とをこた混ぜにして太創作をやつてけた人なのだと私は思つています。それについては各国からの見解がいろいろありましたが、最もすぐれた意見は瀋州ブリスベインのロイ・ラッセル氏が今年四月六日付でよこした書簡のなかの次の一節です。

「過去にいく度も人類は生命のなかの『至上なる英知』を一そうよく理解している人々から眞實の指導を受けてきました。しかしそのたびごとにその知識は「誤った解釈」をされていきます。さもなければ人類はそれを今日受けついでいて、その法則にしたがつて生きていくでしょう。二千四百年前老子は眞理

の言葉を殆ど書き残しはしませんでした。彼の教
えは現代の最も「わけのわからぬ」宗教の一つに變
じています。これはたぶんよい例であると思ひます。
また、西欧のキリスト教は主としてパウロの書簡を
土台としていますが、しかるにパウロは個人的には
イエスに会ったことはなく、それゆゑに彼の書いた
ものはその性質においてしばしば「わけのわからぬ」
ものとなつていきます。どうやら「誤まつた解釈」を
する者は真理の伝え手のおとて出て来る「學」のある
人々であるように思われます。そしてウィリアムス
ンが今それをやっているので。：：ほんの小さな
「眞実」という種子からふくれあがつてゆく歴史的な
言葉と書物ノ、今度こそ我々はその種子を失つては
ならないと私は心から思つてゐる次第です」

x

x

「宇宙誌——宇宙人々を記された増野氏には実に
気の毒ですが、この書は私がCBAから依頼を受け
たのを増野氏に押しつけたかたちとなり、気のすす

まなかつた氏はそれでも黙々として翻訳に励まれて
内容はともかく、立派な訳業を完成されたのですけ
れども、それにたいしてCBAは一銭の謝礼も一片
の礼状もよこさず、ただ三冊の献本と講演会の切符
を一枚よこしただけのことですが、しかし一言の
不孚も云われなかつた氏の態度は尊敬にあたひする
と思つてゐます。

しかしこれなどは如何にもCBA的やり方として、
「彼らも経済的に困つてゐるから謝礼や礼状などを
出さないのも無理はないのだ」といった考えは私に
はあまり起りません。「彼らが何をやってゐるか」
という二つよりも「彼らが如何なる人物か」を一般
会員よりも多少はよく知つてゐるつもりの方は、右
のようなやり方を「当然のことだ」と思つただけです。
CBAにたいして批判的な言葉を述べた人をかたつ
ぱしから「あいつはブラックだ」と罵つたり、密
付金を出ししめる人にたいしては「あんな奴には電
報を送つてやらないだけのことだ」と激しい口調

でわめいていた或る幹部の顔が浮んできます。(註、電報とは大震災発生時の集合地を知らせる暗号電報の意)

この人は中途から幹部になってCBAを一手に指揮していた人ですが、或る有書きをもつために皆からえらく信用されていきました。しかし、いま考えますと人間というものが、有書きに如何に魅せられやすいかということを感じずる次才です。つまり誤っているのは、有書き、そのものにあるのではなく、魅せられる人にあるのでしよう。かつての私もそうでした。――

私は現在次のように考えています。すなわち人間の進歩とは個人の「直感力」の向上することを意味するのではないかと。そしてこの「直感力」の向上をばはむものは外界にたいする「共鳴」なのではないかと思ひます。「眞実の愛」は「感受性」の最高のかたちであつて、これがテレパシーにつながるものであり、我々の追求すべき最終の目標であると思ひますが、しかし「共鳴」が「愛」を破壊する

ために我々は習慣的想念という牢獄から脱出することができません。グループ、イデオロギーなどにたいする「共鳴」という行爲が起るのは、恐怖が消在しているからであつて、それは云いかえれば逃避であり、そして逃避は防禦を必要とし、防禦されるものはいつか必ず破壊されるがゆえに、さきさまの「共鳴」のあいだに絶えまない闘争が起るのであると考えられます。完全なる自由とはこのあらゆる「共鳴」が停止して自我の発見という試みを自ら起し始めた状態を意味するのではないでしようか。そのためには一本の樹木が万象にたいして公平な態度で生きてゐるように、人間も自然の産物としての本質に自覚めて純粋なる自我の発見への旅を始めることがすなわちグループへの「共鳴」以前の問題であると思ひます。「求道」とは要するに人間が「自然」との一体化に近づくための道を求めることを意味するのでないかと私は考えます。この世には人類を救う眞理活動だと称する団体が如何に多いことであ

よう。そして、共鳴くと共鳴くとが火花を散らし
ていきますが、それはクリシユナムルデーの云うよ
うに、せんせん創造的理解力を失った、イデオロギー
にたたりする隷屬^{れいぞく}以外の何物でもありません。もちろ
ん私自身もアダムスキヤクリシユナムルデーに
共鳴することは許されない筈ですが、彼らの思想
に価値を認めることはできる筈です。なぜなら、ア
ダムスキは私にたいして「自分の体験を信じてくれ
と要求したことは一度もなく、ただ「もの、考え、方
を教えてくれた」としか云えませんが、ほんとうの真
理の伝^{ツグ}え手は、思想、そのものを伝えることはせず、
それでも、如何に考えるべきか、のヒントを与
えるものであると私は思うからです。

大変災が発生するから宇宙船で助けてやるという
約束は恐怖からのすばらしい逃避^{たいび}であり麻痺^{まひ}剤です。
そしてそれは一つの段階につなぎとめて、あらゆる
自己発見と覚醒とを停止させるイカリのようなもの
でありまして、真実の進化した遊星^{（と称されるもの）}人かそのようは

イカリで地球人をつなぎとめようとする怪奇な伝説
の意義には甚だ興味深いものがあります。

後記

◎十二月下旬にアダムスキの親友である某^あ人妻が米
国から来日される予定で、東京で私と会うことにな
つています。そのときの模様は、いずれお知らせし
ましょう。

◎アダムスキの才三番目の著書^{（アダムスキの著書）}、^{（空想小説）}『^{（空想小説）}』の訳別
はあと一週間ばかりで私の手元に到着する予定で、
着き次第に翻訳にとりかかりますか、出版できる
かどうかはまだわかりません。しかしできてきたて
もなんらかの方法で内容をお伝え致します。

◎二質問は、遠慮なくお寄せ下さい。できるかぎり
のことは致します。

昭和三十三年九月二十日

島根県益田市益田百川

久保田八郎